

平成 25 年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」
研究報告

研究課題名「北東ユーラシア地域チュルク諸語の類似と相違の研究」

江畑 冬生
(新潟大学)

研究計画の概要

ユーラシア大陸の東西には、チュルク諸語と呼ばれる同系の諸言語が話されており、その大部分は旧ソ連領に分布する。30 余を数えるチュルク諸語のうち、報告者がこれまで主として研究を行ってきたのは、最北東に孤立して分布するサハ語（ヤクート語）である。サハ語の文法構造は他のチュルク諸語からはやや隔絶した位置にあるが、南シベリアのチュルク諸語（特にトファ語やトゥバ語）は、サハ語と比較的に近い特徴も持つとされる。しかしながら、サハ語を含めたシベリア地域のチュルク諸語研究は遅れており、具体的に文法構造のどの部分が類似（あるいは相違）しているのかという観点から、明らかにすべき点が残されている。

本研究は南シベリアチュルク諸語の語彙および文法構造について、文献資料からの研究を進めるとともに、申請者のこれまでのサハ語研究の成果と照らし合わせながら北東ユーラシア地域チュルク諸語の類似と相違について具体的に明らかにしていくことを目指した。

スラブ研究センター訪問

2013 年 6 月および 2013 年 9 月にスラブ研究センターを訪れ、下記資料（スラブ研究センター参考図書室所蔵）などの閲覧を行うとともに、野町素己准教授らとの意見交換を行った。

Бутанаев, В.Я. (1999) *Хакасско-русский историко-этнографический словарь*.
Абакан: Хакасия.

Субраковой, О.В. (2006) *Хакасско-русский словарь*. Новосибирск: Наука.

Татаринцев, Б.И. (2000) *Этимологический словарь тувинского языка*.
Новосибирск: Наука.

研究内容

北東ユーラシア地域チュルク諸語の類似と相違について、語彙と文法構造の点からの考察を行った。

(1) 語彙

語彙については、Johanson (1998: 120) の表 5.1 “Oghuz and non-Oghuz lexical differences” を手がかりとした¹。この表には、チュルク諸語のオグズグループと非オグズグループの間に見られる語彙の違いが挙げられている²。トゥバ語・ハカス語・サハ語の対応語彙における、オグズ要素と非オグズ要素の割合を算出してみた（表 1。オグズ要素と見なせる語彙には網かけを施し、非オグズ要素と見なせる語彙をイタリックで表した。どちらの要素とも決め難い語彙はそのままにしてある。対応語彙を見いだせなかったものは --- で示した）。

結果として、トゥバ語・ハカス語では非オグズ要素が優勢であり、サハ語ではオグズ要素が優勢であることが分かった。

¹ Johanson, Lars (1998) History of Turkic. Lars Johanson and Éva A. Csató (eds.) *The Turkic languages*. London: Routledge. 81-125.

² 当然のことながら、チュルク諸語同士の言語接触やその他の要因により、オグズ／非オグズという二分法が常に明確なわけではない。それでもやはり、この結果は1つの指標としてはある程度の有効性を持っていると考えられる。

[表 1] トゥバ語・ハカス語・サハ語の語彙

	Oghuz	non-Oghuz	Tyvan	Xakas	Sakha
嘯む	isir-	tišle-	тайна	ызыр	ытыр
犬	köpek	it	ыт	ит (адай)	ыт
戸	qapı	eşik	эжик	ізік	аан
フェルト	keče	kiyiz	кидис	---	---
見つける	bul-	tap-	тып	тап	бул
前に	ileri	burun, murun	бурун	пурун	илин
良い	eyi, iyi	yaqşı	эки	чахсы	үтүө
手	el	qol	хол	хол	илии
ウサギ	tavšan	qoyan	кодан	хозан	куобах
唇	dudaq	erin	эрин	ирин	уос
とても	čoq	köp	хөй	тың	олус
へそ	göbek	kindik	хирин	---	киин
他の	başqa	özge	башка	пасха	атын
休む	dinlen-	tin-	дыштан	тынан	сынньан
戻る	dön-	qayt-	чан	айлан	төнүн
送る	yolla-	yiber-	ыт	чолла	быт
話す	söyle-	sözle-	сөгле	сөле	кэпсээ
太陽	güneş	quyaş	хүн	күн	күн
ヤナギ	söyüt	tal	тал	тал	талах
勝つ	yen-	ut-	ут	ут	кыай
狼	qurt	böri	бөрү	пүүр	бөрө
Oghuz			3	4	7
Non-Oghuz			11	10	3

(2) 文法

文法については、目的語の格標示（対格あるいは主格）の選択要因に着目した。トゥバ語とサハ語はどちらもチュルク諸語の北東グループに属しているが、目的語格標示の選択要因はかなり異なっていることが明らかになった。

- (A) サハ語では形態的要因（複数接辞・所有接辞の付加）と名詞句タイプが強く働き、部分的に語用論的特性が働く
- (B) トゥバ語では、少なくとも形態法・統語法・語用論的特性のみでは記述できない。それらに加え主語と目的語の関係性も関わっている可能性がある。目的語の格標示については、トルコ語に関する考察も加え、日本言語学会の

ワークショップにおいて口頭発表を行い（下記の【5】）、さらに『北方言語研究』に論考をまとめた（下記の【4】）。ハカス語などにおける目的語格標示の選択要因が、トゥバ語やサハ語の場合とどのように異なっているのかを明らかにするのが今後の課題である。

成果発表

本研究課題による成果は、すでに下記の形で発表されている。

<論文・研究ノート>

- 【1】 Ebata, Fuyuki. (2014) Proprietary affixes in the languages of Northeastern Eurasia: An overview. *Tomsk Journal of Linguistics and Anthropology*. 2014. 1(3). 9-14.
- 【2】 江畑 冬生 (2014) 「ウワロフスキによる最古のサハ語文の特徴」 『北方人文研究』 第7号. 55-69. (研究ノート)
- 【3】 江畑 冬生 (2014) 「北東ユーラシア諸言語の名詞項標示」 『北方言語研究』 第4号. 1-4.
- 【4】 江畑 冬生 (2014) 「サハ語・トルコ語・トゥバ語の目的語格標示」 『北方言語研究』 第4号. 33-42.

<口頭発表>

- 【5】 2013年6月16日 「チュルク諸語における目的語格選択の要因：サハ語を中心に」 日本言語学会第146回大会ワークショップ 北東ユーラシア諸言語の名詞項標示：茨城大学.
- 【6】 2013年11月16日 「統語機能から見たチュルク諸語の動詞屈折形式」 国立国語研究所名詞化プロジェクト：筑波大学.
- 【7】 2013年12月7日 Quoted imperative statements in Sakha --Between direct and indirect speeches-- “The 11th Seoul International Altaistic Conference” Seoul National University, Korea.
- 【8】 2014年2月23日 Polyfunctionality of verbal endings in Turkic. “NINJAL Typology Festa 2014” National Institute for Japanese language and linguistics.